九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語史における漢語研究の視点と方法

張，愚

https://hdl.handle.net/2324/1866238

出版情報：九州大学，2017，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏　　名　：張　愚

論 文 名　：日本語史における漢語研究の視点と方法

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文の目的は、日本語史における漢語研究の新たな視点と方法の提案である。これまでにない視点からのアプローチや、従来手薄だった領域に関する考察を試みるにあたって、

① **漢語の語源について考察すること、**

② **漢語接尾辞の音訓の違いによる意味上の使い分けを探ること、**

③ **漢語の品詞性を通時的に再考察すること、**

④ **漢語の語義変化がその文成分とどのように関連しているかを明らかにすること、**

⑤ **漢語の語義変化がその品詞変化とどのように相関するかを明らかにすること、**

⑥ **他の類義語（和語）との関連性から漢語の意味変化を考えること、**

の六つのテーマを設定した。

その際、言語学的な理論と文献学的な実証手法のバランスのとれた研究を心がけた。具体的に言えば、方法を論じながらも、抽象的な原理の提示にとどまらず、具体的な現象に基づいて漢語の実態を記述していくことを目指した。こういった基本的な方針に従い、本論文では、「無心」「等」「安楽」「無慙」「迷惑」といった漢語語彙（自立語か、機能語かを問わず）を具体例として取り上げ、考察を行った。

まず、序章**「序論」**で、現在の漢語研究が抱えているいくつかの課題について論じた。また、その課題を踏まえた上で、本論文の目的・方法及び着眼点を説明した。続く第 2 章から第 7 章では、序章で述べた本論文の目的に従い、具体的な事例による検討を行い、日本語史における漢語研究の今後とるべき視点を提案した。

第 2 章**「漢語の語源研究に関する一試論―「無心」を例として―」**では、従来の漢語語源の認定方法を検討し、それらの問題点を指摘するとともに、解決策を論じた。漢字文字列と語義のみを手掛かりとして漢語の語源を検討することの限界を指摘し、その修正案として音訓と漢字表記における意味上の共通性に着目し、語の成立過程を探る方法を提案した。取り上げたのは「無心」という語である。現在こそ同じ読み・漢字表記として用いられているこの語の通時

的な使用様態が、実は複雑で多元的であり、その語源が中国語出自の漢語と和製漢語の両方に関係していることを明らかにした。

第 3 章**「漢字の音訓の違いによる意味上の使い分け―評価的意味を表す漢語複数接尾語「～等」を例として―」**では、漢語複数接尾辞「等」の音訓の違いによる意味上の使い分けについて中世の諸資料を用いて検討を試みた。同じ「等」という漢字語であっても、その訓みの違いによって、上接語に異なった評価的意味を付加できることを明らかにした。

第 4 章**「日本漢語の品詞性をめぐる諸問題―漢語は本当に名詞として受容されたのか―」**では、日本語史における漢語の品詞性について再検討を試みた。現在、漢語は、体言（殊に名詞）として日本語に受容されたとの見方が一般的である。この「体言受容説」は山田孝雄に発するが、その継承の過程において論拠の一部が看過され、漢語に関する文法現象の理解が不十分なまま今日に至っている。本章では、山田説の背後にある理論的基盤を分析し、従来の説を見直すとともに、漢語が原語の品詞性を一定程度保持しつつ日本語に伝来したという説を提示し、その受容と変容の姿を連続的に捉えるには、語の文法的特徴（形態・統語）と意味の面から総合的に吟味する必要があると主張した。

第 5 章**「漢語の文中での統語的機能の変化と意味変化の相関関係―「むざん（無慙）」を例として―」**と第 6 章**「漢語の品詞性と意味変化の相関関係―「迷惑」を例として―」**では、これまで手薄だった漢語の語義変化とその文法的機能の変化との関係について論じた。ここでは「むざん（無慙／無慚／無残／無惨）」と「迷惑」という二語を取り上げた。まず「むざん」については、同じ形容詞用法であっても、文中で異なる成分（叙述・規定・連用修飾といった文成分）を担うことによって、その意味が大きく異なってくることを指摘した。「むざん」は、同一品詞内における文成分の変化と連動して語義も変化した語の好例と言える。一方で、異なる品詞で用いられることによって、語の意味が変化する例として「迷惑」を挙げた。この語の品詞変化（単なる語尾変化を伴う品詞転成ではない）が、その語義変化に影響を与えたか否かについて、上代から近代までの文献に基づいて考察を試みた。初期の訓点資料や古記録・古文書には、「迷惑」は第三者の感情を描写する動詞用法として多用されていたが、中世前期およびそれ以降になると、文書の書き手・日記の記主・話者などの一人称の感情を表す形容詞述語文としても用いられるようになったことを明らかにし、漢語の品詞変化と意味変化の間にも相関関係があるという結論に至った。

第 7 章**「類義語との関係性からみた漢語の語義変化―漢語「迷惑」とその周辺―」**は、他の和語との関連性からみた漢語の語義変化を論じたものである。「迷惑」の周辺に見られる和語「まよふ」「まどふ」の使用様態に注目し、その語義変化との相関関係を論証した。

最後に、**結語**の部分で全体の総括を行った。